

Chuko Shinsho
LaClef
298

朴斗鎮

朝鮮総連

その虚像と実像


中公新書
ラクレ

LC

朝鮮総連

朴斗鎮

中公新書ラクレ

298



ISBN978-4-12-150298-8

C1221 ¥840E

定価 本体840円+税



かつて希望に満ちていた朝鮮総連がなぜ、金日成・正日親子に忠実に従うだけの組織に成り下がってしまったのか。かつて朝鮮大学校で教鞭をとっていた著者だからこそ書ける、“転落”の軌跡。

甲 第 13 号 証

まえがき

在日本朝鮮人総連合会（朝鮮総連）という名称が日本のメディアに頻繁に登場し始めたのは、一九九七年頃からではないかと思われる。それは特に朝銀信用組合の破綻や二〇〇二年九月の小泉訪朝時における「金正日キムジョンイルの拉致謝罪」に関連して語られた。そして諸外国のメディアでも「朝鮮総連」は固有名詞となった。

この間、朝鮮総連の裏面をえぐる「朝鮮総連本」も数多く出版された。こうした本の影響もあって、朝鮮総連は在日朝鮮人の「民族権利擁護団体」であるという従来の認識に、北朝鮮の秘密任務を遂行する「工作組織」であるとの認識が加わった。

しかし朝鮮総連に対する見方は割れている。日本の親北朝鮮派は依然として「民族権利擁護団体」であることを強調し、朝鮮総連の建前の部分だけを見ようとしている。その根底には、過去の歴史にとらわれた「同情と贖罪」の感情があるように思われる。それとは反対に

「工作組織」の側面にだけ焦点を当てて、「嫌朝」などといった排外的気分を助長する人たちがいる。そこには過去の歴史的経緯を無視した「嫌悪と排斥」の感情が横たわっている。

対極にあるこの二つの見方で共通するのは、「是は是」「非は非」といった公平性と理性的判断が欠如していることである。そこにはさらに、朝鮮総連指導部と一般の在日朝鮮人を一体とみる視点が重なっている。北朝鮮の権力と直結している朝鮮総連指導部と一般の在日朝鮮人は一体ではない。

朝鮮総連について言うならば、それは単純な「民族権利擁護団体」でもなければ、組織全体がおどろおどろしい「工作組織」でもない。あえて言うならば「民族権利擁護団体」の中に故金日成^{キムイルソン}と金正日の野望を実現する「非公然組織」が組み込まれた組織なのである。この二つの要素が複雑に組み合わされ、二重構造となることでその実像を見えにくくしている。

ではこの組織はなぜ二重構造となっているのだろうか？ それは北朝鮮が米国を「不倶戴天の敵」とみなし、米国と同盟を結ぶ日本を「敵地」と規定しているからである。故金日成と金正日の野望は、米軍を韓国から撤退させ韓国を支配することにあるが、朝鮮総連は「敵地―日本」で活動するその別働隊と位置付けられている。だからこそこの組織は、建前と本音が異なる二重構造の「閉鎖的組織」となっているのである。

朝鮮総連の閉鎖性は、この組織を「自己完結型」に作っていったが、そのことによって多くの雇用も生み出された。中央本部から支部に至る専従活動家と職員、朝鮮学校の教員と職員、朝銀信用組合の役職員、朝鮮新報社をはじめとした事業体の役職員など、その数は最盛期には二万人を下らなかったと思われる。「祖国統一」と「民族権利擁護」を大義名分とするこの「雇用創出」がなかったならば、挫折していた在日朝鮮人は多かっただろう。

高校まで日本学校に通い、希望のない閉塞感の中でさまよっていた私が、人生の目的と民族性を取り戻せたのも朝鮮総連の活動があったからだ。その活動が差別と貧困をなくし平等社会をめざすという社会正義と結びついていると信じたからこそ、朝鮮大学校政治経済学部で学び、そこで教鞭を執ることもできた。

しかし「同胞の民族権利擁護」を「金日成と金正日の権利擁護」に置き換え、その独裁権力の下で「ブルジョアの甘い生活」にふける指導者の正体を見せられては、取り戻した民族心の行き場はなくなる。その姿は、差別と貧困の解消という運動の原点からあまりにもか離れたものだった。七五年に朝鮮大学校を辞して、新たな人生を歩むことにしたのもこうした背景があつてのことだ。またこのたび本書を著すことにした動機もそこから出ている。

私が朝鮮大学校で教鞭を執っていた六〇年代末から七〇年代初めが、朝鮮総連のピークだ

った。しかし六五年の韓日（日韓）条約の締結と日本の高度成長によって強まった在日朝鮮人の定住志向は、本国従属路線を強める朝鮮総連との乖離を深めた。この乖離は六七年から「金日成絶対化」と七四年からの「金日成神格化」によって決定的となる。また八〇年代に入ってから日本政府による制度面での差別改善への取り組みもそれを促進した。こうして朝鮮総連はその勢力を激減させ、現在は四万人程度となっている。

差別と貧困の解消を社会主義に求め、幻想であったとはいえ北朝鮮支持を受け入れていた在日朝鮮人であったが、金日成を「神」とあがめ、独裁者金正日を偉大なる指導者としただけでなく組織には違和感を覚えるようになった。そこには天皇を「現人神^{あらひとがみ}」として崇拜することを強要され、「皇国臣民」を誓わされた過去の悪夢も重なっていた。

本書は朝鮮総連の歴史を書き綴ったものではない。歴史的叙述もあるが、ここで明らかにしなかったのは、朝鮮総連の構造であり実像だ。実像が解明されない限り、正しい認識は得られず、したがって朝鮮総連に対する的確な対応も出てこない。

本書では、朝鮮総連結成までの経緯とその綱領を批判的に分析したうえで（第一章）、帰国運動によって確立した朝鮮学校と朝鮮信用組合の考察（第二章、第三章）から始めている。朝鮮総連はこの二本柱で勢力の拡大と体力の増強を図り、そのエネルギーを北朝鮮の政権強

化と対韓国工作に投入してきたからだ。対韓国工作活動（第四章）は民族権利擁護運動の保護幕の中で進められ、偽装された。したがって朝鮮総連の「権利擁護運動」と「対韓国非法活動」は手段と目的という関係になっている。主要な目的はあくまで対韓国工作であった。それは朝鮮総連指導部が繰り広げた抗争（第五章）が「権利擁護運動」と全く関係のないものだったことを見ても明らかだ。

各章は朝鮮総連の主要構造を分解して、おのおののテーマとして考察している。したがって順を追って読むことで、全体の構造がよりよく把握できるようになっているが、第一章を読まれた後は、興味のある章から別々に読まれても理解は深められる。また各章ごとに時系列の叙述にもなっているので歴史的事実を追うことも可能だ。

本書では八四年の「北朝鮮合弁法」による在日朝鮮商工人の「合弁活動」は除外した。それは朝鮮総連の活動の一部ではあったが、在日朝鮮商工人が北朝鮮と直接進めた側面もあるためだ。従ってこの活動で大きな役割を果たした「在日朝鮮人科学者協会（科協）」に対する考察も割愛した。ただこの「合弁法」の裏には金正日が進めようとして失敗した「北朝鮮式改革開放路線」があったことだけは指摘しておきたい。もちろんそれは核開発と並行したものであったことは言うまでもない。

なお、人名の敬称は略させていただいた。また「在日朝鮮人」という用語も、戦前から日本に居住する朝鮮（韓）半島出身者という意味として、また朝鮮総連結成後は、そのコミュニティに網羅された人たちとして使用している。「国籍」とは関係のない用語であることをお断りしておく。

二〇〇八年九月

朴斗鎮

目次

まえがき 3

第一章 朝鮮総連の誕生

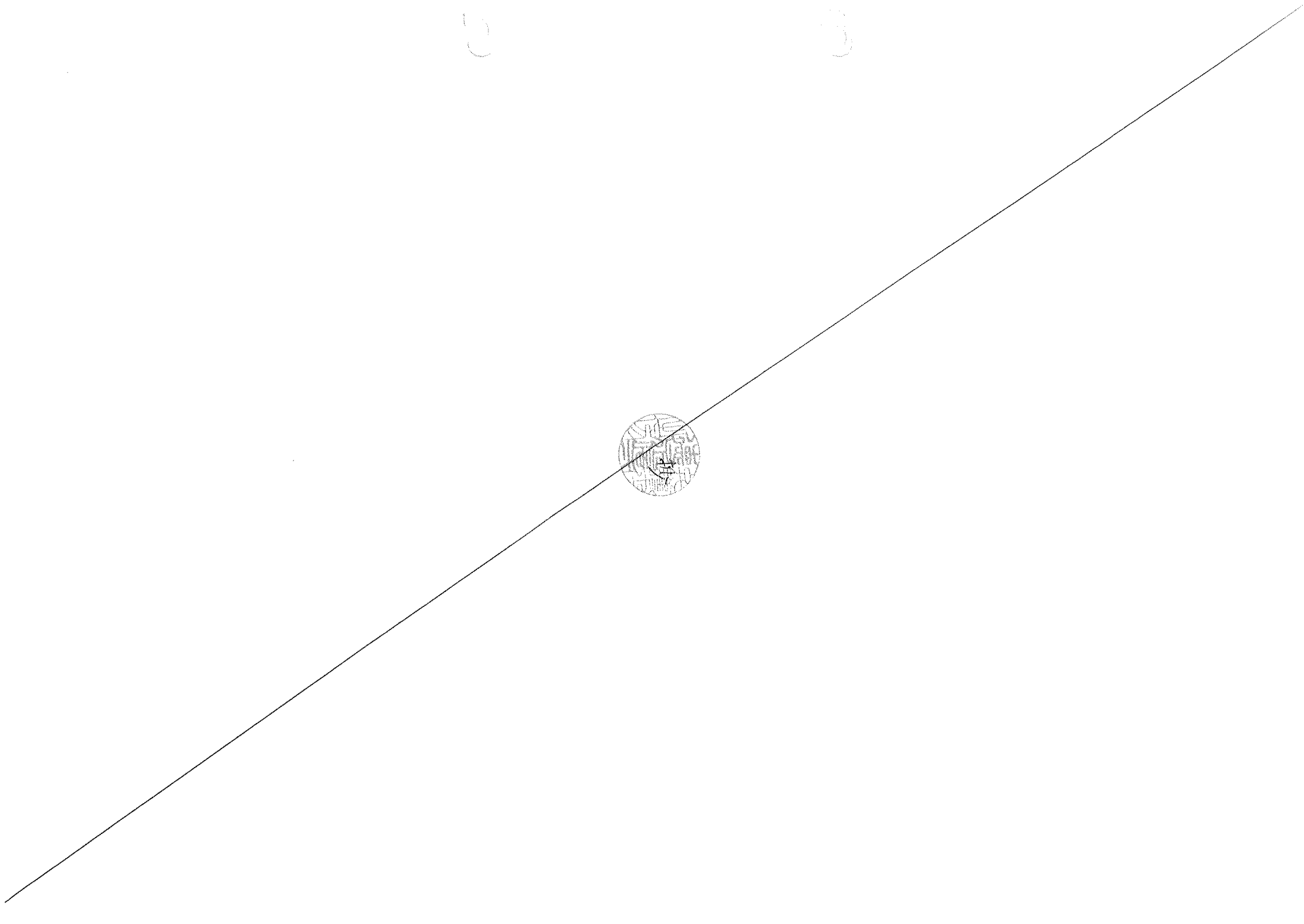
——それは在日朝鮮人コミュニティから始まった

一 朝鮮総連コミュニティの原点 21

戦後在日朝鮮人社会の出发点／根強い地域主義／共産主義者による指導／左右のコミュニティに分裂／朝鮮戦争で過激化した「民戦」

二 朝鮮総連の結成と北朝鮮への従属 33

結成の舞台裏／一九五五年五月に結成／旗印となった「八大綱領」／



てこそ、革命闘争において勝利することができる」(金炳植『金日成首相の思想』読売新聞社刊、一〇九ページ)というもので、スターリンの個人崇拜を北朝鮮流に改悪強化したものだ。

もともとマルクス・レーニン主義では、「首領」は個人を意味するものではなく、労働者階級の前衛である党を意味した。それが指導者の集団を意味するようになり、スターリン時代には個人崇拜と結びつくことで、個人と首領を同一視するようになった。

北朝鮮では、個人崇拜を超えた「個人絶対化」にまで進んだ。一九七四年以降は「唯一思想体系の十大原則」を打ち出し、「首領」を「神格化」して北朝鮮のすべてを首領の所有物とする「首領独裁論」を確立した。

第二章

教育の変質

——朝鮮学校では何が教えられたか

朝鮮総連の力の源泉は、過去も現在も朝鮮学校とそのネットワークインフラ（組織網）にある。帰国船の往来による帰国運動の高揚は、それを急拡大させた。帰国運動が朝鮮学校の拡大に大きな影響を与えたかは、帰国船が初めて新潟港を出港した次の年の一九六〇年に、児童生徒・学生数が朝鮮総連結成時の二倍に当たる三万五八七九人に膨れ上がり、そのピークを迎えていることから明らかだ（金徳龍^{キムドクリョン}「在日朝鮮学校のあゆみと未来への提言」『世界』二〇〇四年三月号）。

たとえば京都朝鮮中高級学校は五八年にモルタル二階建てから出発したのだが、「帰国運動」の高まりの中で教室が不足し、急遽、トタン屋根のバラック造りの教室が建てられた。そうした折、金某氏は北朝鮮への帰国にあたり、処分資産のほとんどを新校舎建設基金として寄付し、その資金で新校舎が建設された。当時こうした事例は全国各地で数多く見られた。帰国運動の衝撃がその後の朝鮮学校を支えたといっても過言ではない。一世帯四人としても約一五万人の在日朝鮮人が朝鮮学校と関係を持っていたことになる。朝鮮総連結成から現在までの約半世紀の間に、高級学校と大学校を合わせた卒業生数は一五万人を数えた。そのうち卒業生網の核となる朝鮮大学校卒業生は一万五〇〇〇人以上となっている。

朝鮮学校の数が最多となるのは児童生徒数がピークを打った一五年後のことである。七五年に山陰朝鮮初中級学校が学校法人の認可を取得したことで一六一校となるが、これは六・三・三・四の体系をもつ朝鮮学校が、六〇年次の在学学生を順繰りに進級させた中で作りあげた学校数である。

朝鮮学校の急拡大は、在日朝鮮人に朝鮮語を継承させ民族的自覚を呼び起こす役割を果たす一方で、彼らを北朝鮮政権と結びつける強力な洗脳の間となった。そして社会主義に対する幻想だけでなく、非科学的な個人崇拜や偏狭な民族主義を在日朝鮮人の中に広め、教育を政治の道具に変えていった。

朝鮮労働党の規約を履行するという政治的要素を教育の中に持ち込み、表の「民族教育」と裏の「社会主義教育（後の金日成・金正日崇拜教育）」を組み合わせた北朝鮮主導の国民教育にしていたのである。こうして朝鮮学校は、表面では民族素養をはぐくむという大衆の要求を吸収しつつ、裏では金日成を崇拜し、その統一戦略に従属させるという二重構造の機関となっていく。

一 朝連、民戦と民族教育

日本における朝鮮学校は朝鮮総連結成以前にもあった。それは日本の敗戦直後にさかのぼる。朝鮮学校の建設は在日朝鮮人帰国準備と次世代教育を目的に「国語講習所」などをも母体として出発した。植民地時代に日本で生活した一世の多くは読み書きのできない人たちが多かったため、家庭で子どもたちに朝鮮語を教えることが難しく、民族的な教育の場を設置することが急がれたのである。「学父兄大衆たちは子弟の教育をすべてに優先させ、金のあるものは金を、知識技能のあるものは知識技能を出し合い、そして組織的な動員を行って東京、大阪をはじめ全国各地で学校づくりが始まった」(朴慶植^{パクギョンシク}『解放後在日朝鮮人運動史』三一書房、一三七ページ)のである。

当初国語講習所の名称で各地に開設された「学び舎」は、朝連の指導の下で次第に組織的なものとなり、朝鮮学校へと発展していった。一九四六年三月頃にピークを打った戦後間もなくの帰国の流れが一段落した後、朝鮮学校は比較的長期的な視野に立った運営が求められ、

いつそう整備されていった。

結成大会で「文盲(原文のママ)退治」のための活動を展開することを決めた朝連は、二回全体大会(四六年二月)で初等学院の設立を決定し、朝鮮語、歴史、算数、理科などの教科書や参考書、童話集も編纂した。

朝鮮学校の教育基本理念は、①全人民すべてが豊かに生きられる真正な民主主義を教える、②世界史の観点に立つ愛国心を育てる、③実生活に土台を置く芸術鑑賞と創作活動を独創的に発揮させる、④労働の神聖さを日常生活と学習を通じて体得させる、⑤科学技術に対する精力的な探究心に点火をする、⑥科学、労働、経済現象の社会連関性を究明する、⑦男女共学を徹底的に実行することであった。

また朝鮮学校のうち初等学校の教育方針は、①進歩的民主主義の建国理念に基づき、祖国愛に徹した社会公民を養成する、②実行力と責任感が強い勤労精神を養う、③健康な身体と鋼鉄のような意志を養う、④美的情操と科学的探究心を陶冶する、⑤教育の課題は広汎、豊富に採択し、若い世代をして国家と社会のあらゆる問題に深い関心を持つよう指導する、となっていた(朴慶植、上掲書一四〇、一四二ページ)。左派独特の言い回しで難しく、何かしら観念的な主張のように思えるが、これが在日朝鮮人の自主的な考えであったことには間

違いない。

朝鮮学校の数は四六年七月時点で五二五校（児童生徒数四万三三六二人）にのぼり、四八年度には六〇六校（児童生徒数五万六三〇〇人）とピークを記録した（金徳龍「在日朝鮮学校のあゆみと未来への提言」）。運営された学校のほとんどは初等学校であった。

だが朝鮮学校の拡大と充実は順調に進んだわけではない。GHQと日本当局の厳しい弾圧政策の中で在日朝鮮人が勝ち取っていったものである。

一九四八年は在日朝鮮人を取り巻く環境に大きな変化がもたらされた。朝鮮半島に米ソ冷戦構造が色濃く影を落とし始め、大韓民国（八月一日）の建国と朝鮮民主主義人民共和国（九月九日）の建国へとつながっていく。こうした政治情勢の変化によって、日本共産党だけではなく、朝連に対しても、日米当局の圧迫が強まることとなった。そして朝鮮学校に対するGHQと日本当局の統制も強まった。

東京、大阪をはじめ、朝鮮人学校が存在する各地で、朝鮮学校の自主性を守り、学校明け渡し命令や学校閉鎖令に反対する闘いが繰り広げられた。四八年四月二四日には神戸で在日朝鮮人と日本政府当局との間で大規模な衝突が起こる。これが今も語り継がれている「四・二四教育闘争」である。しかしこの時在日朝鮮人が体を張って守った「阪神初級学校」はす

でに朝鮮総連によって売り払われ、現在は存在しない。

四八年四月に全国で繰り広げられたこの一連の「民族教育を守るたたかい」で検挙された総数は三〇七六人、起訴された人は二〇七人に達した（朴慶植、前掲書一九八ページ）。

四九年九月の「団体等規正令」によって朝連は解散させられることになるが、朝鮮人学校と民族教育にも大きな試練が押し寄せることとなる。当初日本の殖田俊吉法務総裁は「学校は朝連の財産であっても接収はしない」といつていたが、一〇月一二日になって朝鮮人学校閉鎖の閣議決定がなされた。閣議決定は次のような内容だった。

一、朝鮮人子弟の義務教育は、これを公立学校にて行うことを原則とする。
二、義務教育以外の教育を行う朝鮮学校については、嚴重に日本の教育法令に従わせ、無認可学校は認めない。

三、朝鮮人の経営する学校の経営等は、自らの負担によって行われるべきであり、国または地方公共団体の援助は一の原則からその必要はない。

日本政府は閉鎖通告を出すと同時に、警官を動員するなどして学校を閉鎖していった。その中で守り抜いた自主運営の朝鮮学校はわずか四四校で児童生徒数七、八〇〇人だったという。閉鎖された朝鮮学校に在学していた多くの児童たちは日本学校に分散入学させられた。

存続した朝鮮学校も「朝鮮人学校取り扱い要綱」(四八年二月二〇日)によって運用された。その典型が東京都立朝鮮人学校である。現在の東京朝鮮中高級学校(北区十条)や西東京朝鮮第一初中級学校(立川)などは当時都立として存在した。授業には日本の教員も加わり、校長は日本人であった。

朝鮮学校教育は、マルクス主義思想の影響を強く受けてはいたものの、公権力が介入しない自主的民族教育であった。そこでは、日本で生まれ育った二世たちや子どもの頃に日本に渡ってきた「一世半」の在日朝鮮人が本国帰国後も不自由のないように、朝鮮語を中心とした民族的素養を高める教育が実施されたのである。

朝連は北朝鮮の金日成を支持する傾向にあったが、それは一部朝鮮人の中に誇張され広まった「金日成伝説」が社会主義に対する憧憬と結びついたもので、思想的に強制されるものではなく、従って彼の肖像画が教室に掲げられることもなかった。入学・卒業時に掲げる国旗は、現在の韓国国旗である「太極旗」であったし、子どもたちに聞かせる英雄伝や唱歌などは当時の本国に共通する民族的なものであった。

民戦時代には多くの朝鮮学校が日本の「公立学校」として存在することとなる。しかし五二年四月二八日(五一年九月八日締結)にサンフランシスコ講和条約が発効すると日本当局

は一転して朝鮮学校に自主運営を求めてきた。だがそれまでの統制・弾圧で朝鮮学校の財政基盤は弱体化していたため、その要求に応じることはほとんど不可能だった。日教組などの支援の下に、公立の形態で民族教育を存続することを陳情し続けたが、結局、民族教科は課外とするなど六項目の条件付で五四年度までの存続が許されただけだった。

そうしたこともあり朝鮮学校は、五五年初期には学校数一一〇、児童生徒数一万七六〇四人に激減していた(金徳龍「在日朝鮮学校のあゆみと未来への提言」)。

二 民族教育から国家主義的国民教育へ

朝鮮総連結成後、すべての学校は朝鮮総連の自主学校とし、「各種学校」の認可を受ける方向に転換された。それは日本政府当局が求めたことでもあるが、日本における「北朝鮮国民教育」「敵地内教育」への日本政府の干渉を徹底的に排除したいという朝鮮総連側の要求にも合致していた。

現在、朝鮮総連は、朝連時代の教育をそのまま継承しているのかのごとく語り、それを発展

させた「民族教育」と主張しているが、それは正しくない。あえて継承を云々するならば、北朝鮮への帰属を打ち出した民戦時代の教育を継承したのである。

朝連時代との共通性をあげるならば、朝鮮語教育と社会主義支持教育であるが、これも一九六七年以降の金日成絶対化教育によってその共通性は朝鮮語教育以外ほとんどなくなった。多くの在日朝鮮人は、朝鮮総連の教育には自民族の言語や日本学校では学べない歴史教育、民族文化の素養を育む活動などが含まれているため、朝連時代以来続いている自主的民族教育だと感じているかもしれない。そしてその自主的教育を北朝鮮政府が後押ししている、と。

しかし現実には教科書をはじめ、すべての教育方針を決めているのは北朝鮮政府であって在日朝鮮人ではない。正確には金日成・金正日の絶対化を中心内容とする国家主義的国民教育が行われている。「人権思想」を教えず、むしろそれを「ブルジョア的個人主義思想」として敵視し、「一人は全体のために全体は一人のために」とのスローガンを掲げてはいても、「個人の人格」や「他者」に対する配慮に欠ける教育となっている。金日成絶対化が教育を支配した六七年以降、このスローガンは「一人は金日成のために、全体も金日成のために」へと変質した。

初期の朝鮮学校教育

もちろんはじめからこのような教育が行われていたわけではない。朝鮮総連結成初期には、朝連時代・民戦時代の教育が色濃く残っており、北朝鮮の政治的介入は弱かった。そして朝鮮学校は在日朝鮮人が多く居住する地域にあったため、地域コミュニティーの文化・連帯の拠点として機能し、在日朝鮮人との乖離も少なかった。

「ウリハッキョ（注）わたしたちの学校）私はこの呼び名がとても好きだ。へわたしたちの学校」……まさに子どもをはじめハラボジ（おじいさん）、ハルモニ（おばあさん）、アボジ（お父さん）、一世、二世、三世の老若男女を問わずみんなが愛情と親しみを込めてそう呼ぶ。民族教育の洗礼を十二年も受けた私も例外ではない」（李鍾泰「教育環境改善についての意見書」二〇〇二年一〇月三日）。この文章は朝鮮総連の教育が金日成・金正日崇拜の「国家主義的国民教育」となったことに対する批判意見の中で述べられたものだが、過去在日朝鮮人が朝鮮学校に持ち続けてきた感情を見事に表している。

朝鮮学校は先に述べたように、民族のアイデンティティと自らのルーツを尊び、差別と貧

困に打ち勝つ力強い人材を育成し、民族的素養を次世代に継承することを目的として学父母と教員と在日朝鮮人大衆が一体となって発展させてきた。だからこそ多くの在日朝鮮人は朝鮮学校を「ウリハッキョ（わたしたちの学校）」と呼んだのである。

またこうした一体感が「力のある人は力を、智慧のある人は智慧を、お金のある人はお金を」というスローガンにつながり、朝鮮学校を建設する原動力となった。

しかし、帰国船の往来で朝鮮労働党の支配が在日朝鮮人の中に深く浸透することとなり、それにつれ、朝鮮学校の教育は在日朝鮮人の要求から乖離していく。

帰国運動が本格化する直前の五八年から、朝鮮総連は、その学校教育を北朝鮮の国家体制に編入する準備を整え始めた。第四回大会（五八年）と前後して、朝鮮総連内に朝鮮労働党の細胞である「学習組」が組織され活動を開始するのであるが、朝鮮学校内にも「在日本朝鮮少年団（初級学校四年生から中級学校三年生までの全員）」や「在日本朝鮮青年同盟（朝鮮、高級学校生から大学生を網羅）」が組織された。北朝鮮国家の意思は大衆の目に触れる教科目の授業よりも、むしろこうした学校内の青少年政治組織を通じた活動形式によって強く浸透していった。

このシステムは帰国船の往来過程で、朝鮮労働党の教育政策と直接的に結び付いていく。

表の「民族形式」と裏の「社会主義教育」が巧妙に組み合わせられていくのである。こうして学校教育も朝鮮総連組織と同じような二重構造となっていた。

朝鮮総連結成初期の教育は、マルクス主義的階級教育と社会主義的愛国主義教育（統一教育を含む）を中心とし、そこに緩やかな金日成崇拜教育が組み合わさったものといえ、それは朝鮮総連結成後に創立された朝鮮大学校の教育の中に典型的に示される。

朝鮮大学校創設と国民教育体系の確立

朝鮮総連結成後の朝鮮人学校の体系が、それ以前と区別されるのは、五六年四月に創設された朝鮮大学校の存在である。朝鮮大学校の創立で、朝鮮総連の北朝鮮国民教育は確立したことになる。朝鮮大学校は、一〇余名の教員と六〇余名の学生からなる二年制の学校として東京朝鮮中高級学校（北区十条）の片隅から始まり、五八年四月から四年制となった。朝鮮学校は初級学校から大学校までの一貫した教育体系となったのである。

新校舎建設に伴って五九年六月に現在の小平市小川町に所在を移した朝鮮大学校は、政治経済学部を除き教員養成が目的となっていたため、教育内容の中に、すべての朝鮮学校で実

施される北朝鮮国家の教育方針がこめられていた。移転直後の六〇年度には在学生総数は五〇〇名に達していた。

朝鮮大学校の建設費用は北朝鮮国家が送ってきた資金によってまかなわれたといわれている。五七年から北朝鮮は在日朝鮮人子女に対する教育援助費を送ってきており、その第二回目の二億円あまりが朝鮮大学校建設に投入された。この教育援助費については、韓国政府との関係で日本政府は受け入れを渋っていたらしいが、当時の日本社会には社会主義を支持する勢力が強かったこと、北朝鮮を「地上の楽園」と見ていた人たちが多かったことと、そこに「教育」という大義名分も重なって、日本政府は受け入れることに同意せざるを得なかった。

この資金で東京都小平の小川町に二万坪を確保した朝鮮総連指導部は、「トランジスタラジオの工場（共立産業）を建設する」と偽装して建設を進めた。今でこそ朝鮮大学校の周辺には武蔵野美術大学や白梅学園大学、創価高校などが集まり、学園都市のようになっていくが、当時は周囲一帯が畑だった。偽装宣伝を信じていた近隣の住民は仕事場ができると喜んでいったという。

朝鮮大学校移転によって偽装宣伝がバレたため、近隣住民の反発が起こらないように大学

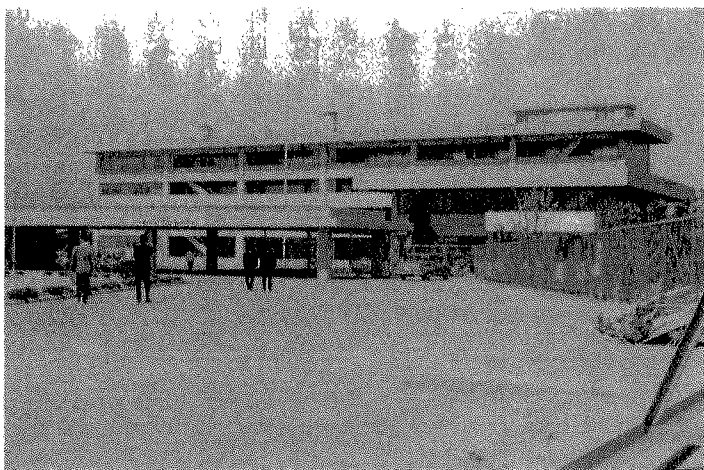
当局は神経を使い、学生たちも反発を買わないように細心の注意を払った。騙されたという住民の感情と朝鮮学校に対する警戒心を鎮めるため、学生は特に道徳面に気を配った。その甲斐があつて、私が卒業する六六年頃には近隣住民の朝鮮大学校に対する信頼は厚いものとなっていた。

朝鮮大学校での授業内容

朝鮮大学校では教育課程と学生組織の活動に朝鮮総連の綱領がそのまま適用されただけでなく、マルクス主義思想とスターリン主義の階級独裁論を金日成崇拜と結び付けて教え込まれた。

この階級独裁論が「首領独裁論」となり、朝鮮学校教育を変質させるのである。ただ、六七年までは金日成崇拜はカリキュラムに反映されていなかった。金日成崇拜は北朝鮮が力を入れて出版した『抗日パルチザン回想記』の学習や本国から送ってくる映画の鑑賞などを通じて推進された。

私が朝鮮大学校に入学したのは六二年四月である。当時の学生生活を紹介すれば初期朝鮮



校門から見た1962年当時の朝鮮大学校本館



教職員の手で建設中の寄宿舍2号館
(1962年)

大学校の教育内容がある程度理解できると思う。

六二年入学当時、朝鮮大学校の建物といえば、教室と教員の研究室のある研究棟と、その横にある事務棟、事務棟の二階には学長、副学長、教務部長が陣取っていた。そして食堂とその二階には講堂があった。講堂といっても名ばかりで数百人収容するのが精一杯の、大きな会議室程度のものであった。寄宿舍は一棟しかなかった。研究棟は著名な建築家が設計したということと六二年度の建築年鑑賞を受賞したと記憶している。

大学校の施設は決定的に不足していた。そこでまず寄宿舍の建設と講堂の建設が始まった。学習と労働を結び付けなければならないということで、放課後には学生たちが交代で参加した。今でもこの建物は残っているが、素人丸出しの出来上がりとなっている。こうした教育方針も、労働を富の源泉と見、労働者階級を社会変革の中核と見るマルクス主義の学説から出たものである。

六四年四月には、政治経済学部、文学部、歴史地理学部、理学部、師範教育学部と学部機構が整備され、六七年には、あらたに工学部が設置された。カリキュラムは政治経済学部とそれ以外の学部とでは大きく違った。政治経済学部以外は、一般教養必須科目としてマルクスの唯物史観に基づく社会発展論や資本主義滅亡の必然性、社会主義の優越性、朝鮮労働党

史などが教えられたが、基本的にはおのおの専門分野の科目が設定されていた。

マルクス主義の階級闘争論や階級独裁論を徹底的に教え込まれたのは、私が属していた政治経済学部であった。それは政治経済学部の卒業生は基本的に朝鮮総連の基本組織（中央―県本部―支部―支所―支隊―支隊）に配属されるからであった。その頃の単位履修表を見ればある程度当時の政治経済学部のカリキュラムが分かる。しかし、科目名は抽象的で一般的な形を取っている、それを見ただけでは実際に行われていた授業内容はよく分からないだろうが。

学生たちの生活

学生は授業で社会主義の学説や北朝鮮の政策を学ぶ一方、学校内の「朝青朝大委員会」（注5）を通じて朝鮮労働党の政策や朝鮮総連の方針を叩き込まれた。大学には五九年度から実施された「給費生（授業料や食費の免除、奨学金の支給）」という、日本でいう「特待生」制度があり、主に地域の「朝青」組織や朝鮮学校で二―四年活動し、推薦された人たちが適用を受けて朝鮮大学校に入学してきた。階級的成分（注6）が良く優秀な一般学生も

入学後にこの制度の適用を受けた。給費生の適用だけでなく、すべての面で朝鮮総連幹部子女や勤労者階層を優遇する「階級成分」が厳しく適用されたため、不利な扱いをされないようにと裕福な商工人の子女も決して裕福だとは口に出さなかったし、そういうそぶりも見せなかった。

この「給費生」たちが学校内「朝青」の要職に配置されたことは言うまでもない。学年による上下関係はあったが、「給費生」の集団は一般学生と区別される特別な「中核集団」であり「権力集団」であった。当時「給費生」の中にはすでに「学習組員」もいて、教員とともに「学習組」の会議に参加する者もいた（これは不都合が多いとして後に変更されることになる）。当時の学生組織内の二重構造といえば、給費生と一般学生を区別して任務を与える程度であった。

学生思想闘争は「朝青」組織を通じて行うことになる。そこでは階級的立場についての教育、朝鮮総連の方針浸透、批判と自己批判が行われた。寄宿舎が整備されるに従って全寮制となったので、寄宿舎の部屋（一室六人前後）単位で行われることが多かった。特に学期末、学年末の生活総括は厳しく、卒業前の総括は熾烈を極めた。

全員が「自叙伝」形式の「総括書」を書き、「民族的立場」に反した思考や「ブルジョア

思想」に侵された思想・生活を総括するのである。「戦いなくして団結なし」とする「階級闘争論」が正義と教えられていたため「温情」「妥協」は許されなかった。厳しい批判を与えるほど「革命性」が高いと評価されたため、人格を無視した批判が横行したのは言うまでもない。特に朝鮮大学校卒業生どうしの結婚は禁止されていたこともあって、学内恋愛と不適切な男女関係に対する追及は厳しかった。しかし要領の良い学生はこの厳しい総括の網をくぐり抜け、自らの行状をさらけ出すことはなかった。

生活はほとんど学内で済ませた。外出は許可を得て初めて可能であったし、休日の門限は厳しかった。それでも規則を犯して外出する学生もいたが、違反が発覚した時には厳しい批判を受けた。ひどい時には全校生の前で批判され自己総括させられた。この厳しさによって規律は維持できたが、学校生活についていけなくて退学する学生も多かった。私が属した政治経済学部八期生も、入学時には六十数人いたが、卒業時には三十数人となっていた。

軍隊のような学内の生活でももちろん楽しみはあった。特に本国から送られてくる映画の鑑賞は楽しかった。今でも印象に残っているのは「一支隊長のはなし」という映画だ。この映画は、抗日パルチザン闘争時の金策キンチエクをモデルにしたものだと言われていた。もちろんこのパルチザン支隊長がいかに金日成に忠実に戦うかという内容であるが、そのストーリーは

それまでの北朝鮮映画には見られない斬新さを持っていた。特に主演女優の禹仁姫ウイニキはすばらしかった。朝鮮人離れした容姿、彫りの深い顔と洗練された動きに男子学生は心を奪われた。その後このウ・イニの名前を聞くことになるのは二十数年後のことだ。在日商人幹部の帰国した息子との「不倫」が発覚し、「公開銃殺」にされたとの情報を聞いた時である。不倫が死刑となる国は多分北朝鮮だけだろう。しかし金正日の不倫はお咎めなしである。

このように厳しい規律と組織力があつたため、全国の学校から入ってきた（当時は日本高校の卒業生や日本の大学を中退した人たちも多く入学した）「問題学生」も朝鮮学校でほとんど「改造」された。朝鮮大学校に送れば「人間がまともになる（サラミテンダ）」との評判が広まり寄付も多く集まった。

「集団主義」の力

階級闘争を美德とする弱点はあつたが、マルクス思想なりの「人道主義」によって、集団主義の良い面も發揮されていた。生活信条が「一人は全体のために全体は一人のために」であつたから、個人で解決できないことを集団で解決したことも少なくなかった。一つ二つ例

を挙げてみよう。

当時朝鮮大学校では、新潟に入港する帰国船の歓送迎事業が定例化されていたため、各クラスは一年に一度これに参加していた。しかしある年、われわれのクラスの四、五人の学友が、費用の負担ができないから参加が難しいと言ってきたのである。カンパをするといってほかの人たちにそれほど余裕があるわけでもない。そこでクラス全員が日雇い労働者として二日ほど働き、経費を調達しようということとなった。ちょうどその時国分寺市役所の新庁舎建設が始まっていたので、そこに参加することにしたのである。建設現場での労働は朝鮮大学校の講堂、寄宿舎を建てる時に経験済みだったから困難はなかった。こうしてこの旅費の問題はすんなりと解決できた。

また学期末試験の時も集団主義は發揮された。試験が近づくと「二人組」をつくり学業成績の良い学生と良くない学生を組み合わせ、「全員が優等生・最優等生になろう」というスローガンの下に助け合いを行った。こうした助け合いが人格形成に良い影響を与えたことは言うまでもない。

「集団主義」の力が教育で遺憾なく發揮されたのが「六〇日間国語習得運動」であった。日本大学から入学した学生に六〇日間で朝鮮語をマスターさせようという運動である。大学内

での日本語使用は一切禁じられ、朝鮮語習得に没頭するのである。六〇日後、習得の早かった学生を選抜して簡単な「演劇」を披露させるのであるが、少々たどたどしいところはあるものの見事に朝鮮語で演じきっていた。

しかしこうした教育内容は「敵地区（日本）内の教育」ということで、できるだけ外部に知られないようにした。資本主義に対する警戒心と内部情報を漏出させまいとする「閉鎖性」はきわめて強かった。当時は在日朝鮮人に対する日本政府の差別政策が今日ほど是正されていなかったし、統一教会系の「勝共連合」などが校門の前まで来て連日「反共アジ」を行っていたこともあり、大学校を「敵」から守るとの意識は自然に芽生えていた。校門前の「勝共連合」メンバーを排除しようとして学生の何人かが警察に連行されたりしたこともあり、こうした意識は強固になった（ところが九〇年代になって金日成は生き残りのため統一教会の教祖である文鮮明と抱擁する。これには私だけでなく多くの卒業生があきれていた）。

特に夜間の警備は徹底的に行われた。「朝青委員会」の指導の下に学生が行うのである。警備は学年、クラスごとに交代で行われていたため、一度当番をすると次に回ってくるまでは相当の日数があったが、当番の時に夜中に起こされるのはつらかった。特に冬はつらかったが楽しみが一つあった。警備の夜食に当時発売されたばかりの即席ラーメンが出たのであ

る。これにキムチと卵を落として食べた味は今も忘れられない。

「本国同化教育」の内容

朝鮮大学校でこうした教育を受けた人たちが、朝鮮総連の各組織と朝鮮学校に配属されることになる。だから高級学校以下の朝鮮学校でどのような教育がなされたかは、推して知るべしだ。下級の学校にいくにしたがって教育内容の社会主義的・階級的側面が薄められ、民族的側面が表面に出るようになってはいたが、基本は社会主義の優越性と金日成の革命闘争を賞賛することであった。それは南北朝鮮について教える時に、金日成指導下の北朝鮮は「地上の楽園」「この世にうらやむものなし」で、南朝鮮（韓国）は徹底的に「生き地獄」「アメリカの植民地」であると教えたことに典型的に現れている。

学校内政治組織である「少年団」や「朝青」の役員登用も、子どもたちの能力や資質よりも「出身成分」が重要視された。最優先されたのは朝鮮総連幹部、それも上級組織の幹部子女であった。もちろん幹部であつても韓徳銖派に反対した「民対派」の幹部子女は除外された。

元朝鮮大学校教員を父に持つジョンズ・ホプキンス大学教授のソニア・リヤン（梁スン）は次のように回想している。

「小学校から大学までのすべての教育を私は朝鮮総連系の民族学校で受けた。私の父が朝鮮総連傘下の朝鮮大学の教官（すでに退官）であり、北朝鮮政府から重ねて受勲した経緯から私は幼い頃から学校で総連幹部になるための特別な指導と訓練を受けた。

これはどういうことかという、誰もが少年団員になる小学校四年から選ばれた私たち少数の幹部候補生たち（熱誠者と呼ばれた）は、『合宿』という名目で学校での寝泊まりを強いられ、昼間は他の生徒たちとともに授業を受け、夜は『批判と自己批判』に取り組むということだった。私たちは自分たちが使っている用語の意味もわからないまま互いを『裏切り者』呼ばわりをしながら自己の精神・思想的浄化をはかった。もちろん子どもだった私たちにとって貸し布団にもぐって教室で寝泊まりすることほど楽しいことはなかったので、『批判と自己批判』もたいした苦痛にはならなかった」（ソニア・リヤン『コリアン・ディアスポラ』明石ライブラリー、六ページ）

李承晩政権を倒した六〇年四月一九日の韓国での人民蜂起もあつて、六〇年代前半の在日朝鮮人は南北朝鮮の統一が近いと考えていた。したがって朝鮮総連の教育も、祖国の統一と

統一後の社会主義建設に参加することを前提としており、日本に定住することを念頭に置いてはいなかった。それゆえ日本社会で暮らすのに必要な知識の伝達は少なく、むしろソ連や中国など社会主義圏について教えられることが多かった。朝鮮大学の外国語教育でも英語よりもロシア語が中心だったし、各高級学校の科目でも英語は軽視されていた。それはある種、「本国同化教育」というものであり、だからこそ一万人あまりの生徒と学生が北朝鮮に帰国したのである。

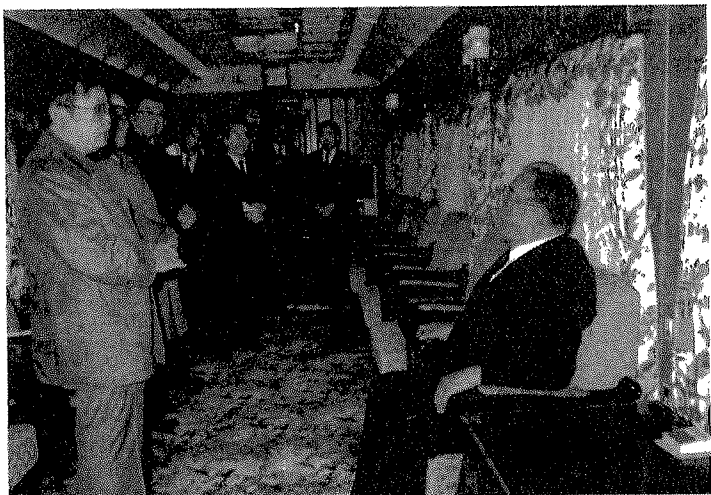
それでも当時は、金日成のほかに、朝鮮の歴史的人物である乙支文徳、淵蓋蘇文、姜邯賛、李舜臣などの名将や、丁茶山などの実学派学者の活躍を紹介したり、朝鮮解放は旧ソ連の軍隊によってなされたなど、比較的史実に近い歴史を教えていた。文芸面ではプロレタリア文学の流れをくむものであったが、朝鮮の名作だけでなく世界の名作なども紹介し、教えていた。音楽も民謡など民族情緒が豊かなものが多かった。しかしこうした民族的教育も、六七年以降は金日成絶対化を阻害するものとして否定されていく。

三 金日成絶対化教育と朝鮮学校の衰退

一九六七年の朝鮮総連第八回大会以降、朝鮮総連コミュニティーに「金日成絶対化」の波が押し寄せる。その波は朝鮮学校を覆っただけでなくその教育内容をも一変させた。民族性の維持と日本での定住という、在日朝鮮人が求めている教育とはますますかけ離れたものとなり、朝鮮学校はみるみるうちに衰退していった。

教育現場に押し寄せた金日成絶対化の波

一九六七年五月の朝鮮労働党中央委員会第四期第一五次全員会議と、それに続く六月の第四期第一六次全員会議は「革命における首領の決定的役割論」(注4参照)を採択し「首領による唯一領導」を何人も侵すことのできない「聖域」へと押し上げ、「チュチェ(主体)思想」を首領の思想とし、朝鮮労働党の「唯一思想」として確定させた。そしてそれを全党



特別列車の中で話し合う金日成主席（右）と金正日書記（1989年。
朝鮮通信=時事）

は破棄された。

たとえば五八年に朝鮮労働党出版社から出版された李羅英の『朝鮮民族解放闘争史』。

この本は、金日成の抗日闘争だけが「革命伝統」だとする観点から書かれた「個人崇拜」助長の先端を行く本であった。朝鮮総連でも正統歴史書として朝鮮労働党史に準ずる扱いをした。しかしこの中に「金日成絶対化」に支障を来す「真実」が含まれていたのである。

それは、①金日成の父金亨稷を「朝鮮国民会」の創建者であり民族解放運動の卓越した指導者として描かなかったこと、②二六年に金日成が共産青年同盟に加盟したとだけ書き、主体思想によって打倒帝国者同盟を組織し革命闘争を開始したと書かなかったこと、

全組織に浸透させた。この時に「反党分子」として肅清されたのが朴金喆、李孝淳、金道満などである。またこの頃から朝鮮総連内部でも「宗派（分派）狩り」がはじまることとなる。

この「首領の決定的役割」の論理は、①人間がすべてを決定する、②人間の行動を規定しているのは意識である、意識は自主意識と創造意識として現れるがそれが高まれば高まるほどその決定力は増大する、③自主意識と創造意識を与えるのは「偉大な首領」である、それゆえ「偉大な首領」の「領導」を離れては人間の決定的力は発揮できない、④結論として「首領」が決定的であるからそれを「絶対化」しなければならない、というものであった。

こうして在日朝鮮人運動の中でたえず論争の的となっていた「北朝鮮国家擁護論」は「金日成絶対崇拜論」に変質し、宗教的様相を帯びていく。そして朝鮮総連組織は金日成を神とあがめる組織に改変されていった。朝鮮学校の教育内容も変えられた。

「首領独裁」の実践はまず、歴史改竄と「首領に対する観点の確立」という思想改造から始められた。この運動の激しさは、その当時中国で繰り広げられていた「文化大革命」に勝るとも劣らなかつた。それまでの金日成礼賛のレベルでは「首領の地位と役割」を認識するに程遠いとして、北朝鮮では、六七年以前に出版された一切の書籍は回収され、改竄もしくは破棄された。

③金日成が三一年に中国共産党に入党したと書いたこと、④四〇年八月一〇日に祖国解放の問題を討議したとする小哈爾吧嶺會議を記述しなかったこと、⑤朝鮮の解放をソ連軍隊による解放と書いたこと、などである。そのためこの本はすべて回収されることとなった。

またこの二年後に金日成の抗日パルチザン闘争を美化するために発行された林春秋の『抗日武裝闘争時期を回想して』（朝鮮労働党出版社、六〇年一月一五日発行）も、「首領の偉大さ」の原点となる「革命伝統神話」の障害になるとして批判され、回収された。

この本で問題視されたのは、中国共産党幹部の魏琢民が三六年五月の東崗會議で、朝鮮人民革命軍あるいはその他の「民族形式の軍隊」を創建してはどうかとのコミンテルンの提案を提起したのに対して、金日成が、朝鮮人が絶対多数を占めている二軍を事実上朝鮮人民革命軍または「コリ紅軍」と呼んでいる状況下でその必要はないとした事実と、朝鮮人民革命軍の問題が三二年ではなく三六年になつてはじめて討議されていたという事実を明らかにしたことである。これは、金日成が三二年四月二五日（現在、朝鮮人民軍の創建日）に朝鮮人民革命軍を組織したとする「公式見解」を根本から覆すものであつたために、大問題となつたのである。

名前を消された偉人たち

このように、金日成絶対化の障害になる出版物はすべて破棄されるか回収された（日本では徹底できなかった）。そして、金日成とその家族についての新たな歴史の作成に着手する。そこで誕生したのが白峰著の『民族の太陽金日成將軍』である。この本では金日成を偉大な首領と賞賛するだけでなく、金日成の父母、祖父母、曾祖父母らを「神聖な革命家族」に作り変えた。その後、金日成絶対化のために数多くの書籍と論文が次から次へと出版されたが、こうした「金日成本」ではおおむね次のような内容が記述されている。

「金日成の誕生は、新しい人類の歴史の始まりであり、その思想は人類最高の思想、永世不滅の完成された思想である。その思想から生まれた理論と実践は無謬性を誇り完全無欠である。その結果北朝鮮の社会は『地上の樂園』となり、衣食住に何不自由なく、教育と医療は無料で、すべてが完全に保障されており、職業選択の自由は勿論、失業者も皆無であるばかりか、浮浪者さえも存在せず、強盗泥棒のたぐいは過去のものとして忘れ去られた完全無欠の社会主義である。そして北朝鮮の社会主義は、『社会主義の模範』として世界の人々から

賛辞を送られている。金日成の子金正日は、白頭山の精気、靈氣を集め白頭光明星の輝く中天変地異を伴って生まれ、その天才ぶりは全分野にわたっている。そして人類最高の思想『チュチェ思想』を一層発展させて『人類最高の社会主義』を実現している」（『民族の太陽金日成將軍』『時代の星』『後継者論』など）。

金日成絶対化を実践するため、朝鮮総連はそれまで「祖国研究室」と呼ばれていた研究室を、「金日成元帥革命歴史研究室」に改め、金日成の肖像画を収める額縁まで規格化し、全同胞的運動として展開させた。また『金日成語録』をはじめ、改竄された金日成に関するすべての物語を暗記することや、胸に金日成バッジをつけることを義務付けていった。金日成の「肖像」や「写真」は捨てることも焼くこともできなくなり、写真や肖像が掲載された新聞のたたみ方まで指導された。そのため、金日成の肖像画が使われた印刷物の処理に幹部たちは頭を悩ませることとなる。また金日成の名前の前には彼の「偉大さ」を称える修飾語が長々とつけられ、その種類は三八もあったと言われている。こうして朝鮮総連の隅々まで「首領独裁制」が浸透していくことになる。

朝鮮学校は思想改造の場として重要視され、教科書はすべて書き換えられて金日成礼讃一色にされた。歴史教科書からは民族の偉人たちの名前は消えていった。すべての教科は金日

成に関する内容で埋め尽くされた。例えば英語の教科書は英訳された「金日成伝」であり、算数や数学の例題は金日成の物語から作り出され、国語はそのまま金日成にまつわる話を教科書とした。

教科書だけでなく学校内の「少年団」や「朝青」も大きく変化した。そしてこれらの組織にも特権階級が登場することとなる。ソニア・リャンにもう一度語ってもらおう。

「思春期を経て成長していくにつれ、このような機械的な『思想浄化闘争』に対する疑問がわいてくる。青年同盟（すべての朝鮮高校生が加盟することになっている）でもやはり組織委員を務めた私は、同じ幹部候補生の中でもたとえば、故韓徳銖総聯議長の娘たちは段違いの特別扱いを受けていることに気づく。私が朝五時半に起きて満員電車で息苦しくなりながら東京近郊の八王子から北区十条まで通学した三年間、彼女たちには送り迎えの黒塗りの車が待っていた。校則に完全に違反するような髪型・服装をしていたも、彼女たちには青年同盟の主導的な役割が与えられた。子どもじみていたがゆえに純粹だった私たちの心にはこういう特別扱いがうす汚い不平等に見えた。特に私たち（幹部）候補生は常に自己を『敬愛するキム・イルソン主席と親愛なるキム・ジョンイル書記に忠誠な闘士』として必要とあらば命まで捧げよと訓示され、地下（非公然）組織である『学習組（筆者注：熱誠班の間違いと



朝鮮大学校教員時代の著者（前列左から6人目）、学生とともに

銖で常勤ではなかった）の所ではなく、教養部（学習組を統括する部署、日本の大学などで使う教養部とは異なる）の張在寛部長のところにあった。大学校の権力は教養部に移っていたのである。教養部は全教職員を政治的に掌握するだけでなく、「朝青委員会」を通じて全学生を掌握していた。そして時には学生を紅衛兵のように使って、韓徳銖・金炳植に反対した教職員を「金日成に対する観点を正す」との口実で追及した。「金炳植事件」（七二年）で金炳植が失脚した後、張在寛部長は自己総括を求められたが、労働者からたたき上げの「人の良いおじさんタイプ」の彼は「総括書」も十分に書けなかったという。その彼が「大学校に赴任した時は、頭のいいインテリをどのように指導すればよいかと心配したが、権力で

思われる』の空手をふくむ心身精錬につとめていた」（ソニア・リャン、前掲書六〇七ページ）。

高級学校ですらこのような教育が行われるようになっていたのだから、朝鮮大学校での変化はさらに激烈なものだった。

政治組織が権力を掌握

六七年といえば、私が朝鮮問題研究所に在籍していた頃である。朝鮮問題研究所は当時、金日成絶対化という政策に便乗して自己の政敵を肅清していった金炳植（当時副議長）の直属機関となっていたので、こうした激変を感じ取れなかった。研究所は彼のゴーストライターを務めた南朝鮮研究室長や、ユニバーストレーディング事件（注7）で有名な高德基などがいたため、思想闘争が吹き荒れない「台風の目」のようだった。

私が朝鮮総連の変化に直面したのは、六八年の四月に朝鮮大学校の教員として赴任してからである。朝鮮大学校政治経済学部に赴任してみるとすべての雰囲気は変化していた。赴任の翌日、学部長に連れられて挨拶に行ったのは李珍珪副学長（後の第一副議長。学長は韓徳

上から押さえつけると案外簡単に従ってきた」と七二年の総括時に述懐していたことが印象深かった。

大学一年生の時の担任も大きく変わった。彼は教養部副部長の職責をもらっており、担任時の素朴なマルクス経済学者の面影はなくなっていた。学生時代、私は彼に可愛がってもらったこともあって親しみを感じたが、他の教職員は彼に恐れを抱く人が多かった。権力が人を変えるさまを目のあたりにした時だった。

学内に吹き荒れた思想闘争の嵐

私は赴任して間もなく「学習組員」（注8）となり、「政治経済学部学習組」の一員となった。そして「学習組」内の思想闘争に加わることになる。

思想闘争で総括の対象になった教員は、過去に韓徳銖・金炳植に反対した経緯のある教員、マルクス主義の信奉から離れられない教員、日本の大学を卒業して金日成絶対化に積極的でない教員などであった。思想総括は週一回ぐらいの頻度で行われた。当時の学部長も総括対象となった。その理由は、朝鮮問題研究所所員であった頃、金炳植の所長就任に賛成せず、

李珍珪を推したことであった。

あとで分かったことだが、当時の主要学部長はほとんど総括対象となっていた。六八年から七二年までの四年間、この嵐は吹き荒れ続けた。金炳植失脚後、「総括」から解放された幹部教員はほとんど過去の面影を失い、頭脳明晰であった幹部も平凡なインテリとなっていた。あの熾烈な思想総括を乗り越えるには「思考」を停止するしかなかったのだろう。こうした過程で、一命を取り留めたものの「自殺」を図った幹部教員もいた。

そのほか思想闘争の一環として、教職員組織の間で金日成語録の「暗記」発表会が定期的にもたれたが、ここでは外国語学部の教員がいつも先頭を走っていた。老教員は暗記に四苦八苦していたのを記憶している。

学生の間では「金日成元帥に対する観点の確立」が思想闘争の主要内容となった。これに關しては「民族対策部」に属していた父母を持つ学生が最も厳しい追及を受けた。また学生の中に「熱誠班（忠誠心の強い学生生徒の組織）」が組織され、過去にあった「給費生」を中心とした組織よりも一層過激で秘密に満ちた「非公然組織」が学生の中に構築されていた。この非公然組織を指導したのはもちろん教養部である。一般の教員は、こうした組織が学内に存在することすら知らず、どの学生がこの組織のメンバーであるかは知るよしもなか

った。卒業後こうした学生の中から「ふくろう部隊員」「補助工作員」「対南工作要員」が選ばれた。その一方で一部特殊幹部子女に対する特別扱いが横行することとなる。これはソニア・リヤンの回想の中でも指摘されている。

当時、重要幹部の子女はすべて政治経済学部送到されてきた。政治経済学部には全国の朝鮮高級学校から「熱誠班」に属していた生徒など「選ばれた人材」が集まった。それは幹部養成のためという理由もあったが、この時期、韓徳銖や金炳植の娘が入学してきたことも関係している。そういう意味では七二年までの政治経済学部は朝鮮総連中央と直結する「黄金時代」だったといえる。

私もこの娘たちを教えたが、韓徳銖の長女は女性らしさを持った柔軟な学生だったと記憶している。それに比べて次女は気性が強く、議長の娘だということを鼻にかける傾向があった。卒業後大学の研究院生（大学院生）となるが、欠席することが多くて指導教員を困らせたと聞いている。金炳植の娘は父親似の浅黒い顔立ちの学生だったが、教養部は韓徳銖の娘よりもこちらのほうに神経を使っていた。この時期は朝鮮総連が最も官僚化していたこともあって、朝鮮大学校初期の「平等思想」は影を潜めていた。

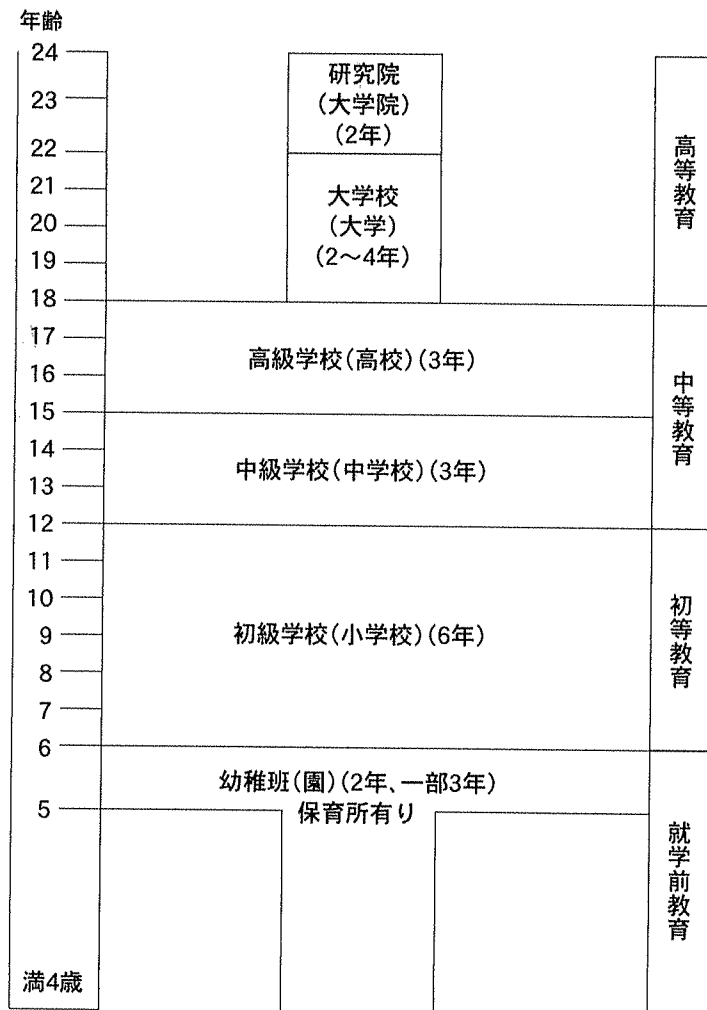
首領絶対化教育は今も変わっていない

授業科目も単純化された。あらゆる科目が金日成絶対化と結び付けられたため、それ以外の科目は「不純思想」をもたらすとして排除されたのだ。それまで教養科目で必須であったマルクス・レーニン主義は「政治経済学」を除いてすべて外され、それに代わって「主体思想」と「金日成革命歴史」が主要科目として登場することとなる。日本人をはじめとした若干の外国人講師も一掃された。「金日成革命歴史」は初級学校から必須科目とされたため、学生は大学を卒業するまで同じ内容を繰り返し学習することとなった。

また金日成絶対化に絡んだ科目は、特定の指名された教員以外は教えることが出来なかった。こうした科目は政治経済学部と教養部のメンバーが受け持った。

私にも多くの科目が任された。「金日成の労作」「朝鮮労働党の政策」「政治経済学」「南朝鮮革命と統一戦略」などを受け持った。「政治経済学」は必須科目として他学部の学生にも教えていたので、週一〇時限（一時限九〇分）以上の講義を受け持っていたことになる。教員は授業以外にも学生の生活指導を行い、日本の各大学に出かけて教授たちとの交流も深め

朝鮮学校の教育体系



「在日朝鮮人の民族教育の権利——21世紀に向けて朝・日友好と国際化の中で」
(在日本朝鮮人教育会編 1996年1月)より作成

なければならなかったため、研究時間が決定的に不足した。
金日成絶対化を推し進める中で科目数が減少していったので、学生の中には自嘲気味に次のような学部評価を行う者もいた。「暇な政経学部(科目が少ない)」「馬鹿な歴史地理学部(二にも二にも金日成の革命歴史)」「書けない文学部(思想統制がきつく自由な創作が出来ない)」「しゃべれない外国語学部(『金日成伝』などの翻訳英語が教材)」「解けない理学部(専門科目よりも思想科目を重視)」「作れない工学部(実践施設がない)」。この評価は金日成絶対化の教育実態を如実に表している。また、各学校に配属される教員の質が著しく低下したことも意味している。やがて在日朝鮮人の、朝鮮学校教育に対する不満が顕在化していくことになる。

その後朝鮮大学校は、日本定住が決定的となった在日朝鮮人のニーズに合わせてさまざまな工夫を凝らし、経営学部や法律学科などを新しく創設し、また国際的ニーズにも合わせようと「単位制」も導入した。そして今ではごく一部であるが、朝鮮大学校卒業生が司法試験に合格したり、在学生が「公認会計士試験」に合格するなど、私がいた頃とは大きく変わった。また学生生活もはるかに自由になったと聞いている。しかし「金日成大元帥革命歴史」「金正日元帥革命歴史」といった科目はあいも変わらず必須科目となっており、金日

成・金正日絶対化教育は依然として教育の中心となっている。初期には少なかった教授などの職位や、博士などの学位も北朝鮮から数多く授与され、大学校当局も朝鮮大学校を北朝鮮の海外国立大学だと言ってはばからない。

二〇〇〇年一二月に朝鮮大学校評議會を指導した朝鮮総連責任副議長の許宗萬^{ハジヨンマン}は次のように述べた。「敬愛する將軍様は、一九九四年五月六日のお言葉で『朝鮮大学校では学生を政治思想的にしつかりと準備させることに中心を置き、大学期間にチュチェ（主体）の世界観、首領観（筆者注…金日成・金正日を崇拜すること）、民族観を人生観化した革命家、確固とした青年の中核をしつかりと育てなければならぬ』とおっしゃった。朝鮮大学校は本質において在日朝鮮人運動の代、愛国の代を継ぐチュチェ型の青年中核を育てる源泉地である」。

この許宗萬責任副議長の発言でわかるように、現在も朝鮮大学校の使命は、金日成を崇拜し、徹底して金正日に忠実な人材を作り出すことにある。そのため「熱誠班」など、学生に対する裏と表の二重教育も続けられている。朝鮮大学校の学生数の減少は歯止めがからず、その数は八〇〇名を切り、初期の頃の人数に逆戻りしているが、こりもせず金日成主義教育は続いている。

朝鮮大学校は朝鮮総連が運営する国家主義国民教育の頂点に立つ学校であり、朝鮮総連教育の終着駅である。そこでの教育目的が、金日成・金正日崇拜に凝り固まった「革命家」の養成にあるのだから、高級学校以下の教育も依然としてその本質は変わっていない。

四 民族教育への転換を求める教育関係者と学父母

在日同胞が帰国志向から日本定住志向へと変化していた一九七〇年代、朝鮮総連は同胞の思いとは逆に主体思想教育^{チュチュ}や金日成・金正日絶対化の北朝鮮国民教育を強化させていった。それは、真実を教える教育とは程遠い洗脳教育であった。こうした中で、多くの在日朝鮮人は仕方なく子女の教育を日本学校にシフトさせることとなる。

この動きは朝鮮総連幹部の間にも広がった。危機感を募らせた朝鮮総連中央は「幹部の子女は朝鮮高校卒業まで日本学校に送るな」とする統制を敷き、それを破った幹部に対しては、左遷、首切りなどの圧力を加えた。また、日本の中学、高校に進学しようとする一般同胞子女には、進学に必要な書類を出そうとしなかった。

た。六七年から七〇年代前半はもちろん、金正日が「金日成主義」を打ち出した七〇年代後半以降もこうした露骨な教育は続いた。その結果、同胞の我慢は限界に達し、今や朝鮮学校数は四〇〇校ほどとなり、児童生徒・学生数は一万人を切るところまで来ている。

危機感を募らせた一部の専従活動家と教育関係幹部は、有力商人とともに朝鮮総連の民族教育を日本の実情に合わせて改革しようとする動きを表面化させ、九八年十二月五日付で、朝鮮総連中央指導部に「民主主義民族教育を改善強化することについて」なる具体的改善案を提示した。この要望書は（１）二十一世紀の新時代と民主主義民族教育の理念、（２）課程案編成と教育内容及び水準上提起されるいくつかの問題、（３）学生教養事業に対して、（４）至急是正対策が必要ないくつかの問題、（５）教育事業に対する民意反映の制度化と組織化、の五つを柱にした、B5サイズ全二六ページにわたるものであった。提出したのは、東京朝鮮中高級学校新校舎建設委員会と「民族教育フォーラム」の参加者一同だった。

この動きは、体制内改革という制約を含んでいたが、総連中央指導部に大きなショックを与えた。当時朝鮮総連中央は、その提案に応じるのかとく装い、改革グループを一人一人個別に懐柔工作を行って結局うやむやにしたのである。しかしこの流れは、朝鮮総連系同胞の韓国での「韓日共催ワールドカップサッカー」観戦や故郷訪問で再び大きくなる。特に〇

朝鮮学校、大学校に関する年表

1946年2月	朝連、初等学院の設立を決定
1948年4月24日	阪神教育闘争
1949年10月12日	朝鮮人学校閉鎖の閣議決定
1956年4月	朝鮮大学校の設立
1960年4月19日	韓国で人民蜂起（李承晩政権倒れる）
1967年5月、6月	朝鮮労働党中央委員会の会議で、「チュチェ思想」を唯一思想に確定
1975年	山陰朝鮮初中級学校が学校法人の認可を取得したことで最多の161校となる（現在は約100校）
1998年12月5日	学父母による「民主主義民族教育を改善強化することについて」とする意見書が中央本部に提出される

在日同胞が求めていたのは、言語、歴史、文化など、民族的アイデンティティーの確立に必要な教育や、日本に適應する教育であつたにもかかわらず、朝鮮総連は、金日成・金正日に忠実な人間を作り出し、自己の勢力を拡大するための教育を行い、その乖離は拡大の一路をたどった。

教育改革へのうねり

朝鮮学校教育をめぐる総連中央と在日朝鮮人の意見対立は金正日が後継者の地位を確立することによつてますます大きくなった。彼の登場以後、金日成主義の徹底が朝鮮学校での教育の中心となり、民族的素養や特に異国に住むマイノリティとして身につけなければならない、人権や民主主義についての教育は無視され

二年九月一七日の朝日首脳会談での「金正日の拉致謝罪」以降、抑えることのできないうねりとして現れることとなる。

朝鮮総連の「国家主義的国民教育」を在日朝鮮人のための自主的民族教育に戻すため、一部の朝鮮総連幹部と教育関係者は「民族教育ネットワーク21」を組織し、朝鮮学校教育のあり方を再度模索した。また一般同胞も総連組織に対して「同胞の学校なのか総連中央の学校なのか」と詰めより、「同胞に付くのか総連中央に付くのか」と校長や県本部委員長に聞いた。ただし。

朝鮮大学校を卒業して教員も務め、西東京朝鮮第一初中級学校に二人の子どもを送る朴郷丘も「北朝鮮は、我々が考えてきた姿とは異なるものだということがわかった。そこは労働者の楽園ではない。私たちは真実でないものを子どもに教えることはできない」（『ワシントンポスト』○三年一〇月一〇日付）と述べ、朝鮮総連の教育を厳しく批判した。こうした同胞の自主的民族教育を求める圧力に抗し切れなくなった朝鮮総連は「だれの学校か」という問いに対してついに本音を吐き、「われわれの学校は金正日將軍様の学校だ」と言い放った。

現指導部の退陣しか道はない

最近、朝鮮学校の教科書が在日朝鮮人の実情に合わせて改変されたと言われているが、高級学校の思想教育の科目である「社会（北朝鮮体制擁護と主体思想）」や「現代朝鮮革命歴史（金日成・金正日崇拜）」は本質的には何も変わっていない。あまりにも虚偽に満ちた記述の一部を修正しただけだ。また変化の象徴として初中級学校で金父子の肖像画を下ろしたとしているが、これもそれまであまりにも露骨に北朝鮮の方針を押し付けて同胞の反発を買ったため、その「色」を少し薄めようというものである。その証拠に肖像画のかわりに金日成が描かれた「油絵」などを教室内に飾るように指示している。

朝鮮総連の教育は、「国家主義的国民教育」路線を放棄し、大多数の在日朝鮮人が求める自主的民族教育に転換しない限り、展望は明るくない。

しかしこの転換を実現するには、金正日に追従する朝鮮総連現指導部の退陣が不可欠だ。またそれを促進するためには、朝鮮総連構成員と学父母の強い決意と行動が求められる。だがこれは非常に困難な要素を含んでいる。なぜなら、現在、朝鮮総連傘下に残っている在日

朝鮮人と学父母は、ほとんど北朝鮮や朝鮮総連の機関と何らかの利害関係をもつ人たちだからだ。朝鮮学校は、今や離れる人はほとんど離れ、一般同胞の子弟よりも組織関係者の子弟のほうが多いという状況である。生活を朝鮮総連に依存し、北朝鮮に人質を取られている人たちでは、なかなか根本的改革には立ち上がれない。また教育を自主的運営に転換するにしても、すでに学校運営が財政破綻しており、その再建には広範な同胞の財政支援が必要のため、教育内容の改革なくしてはそれも難しい。

朝鮮学校を除けば、日本で民族の言葉や歴史や文化を学ぶ場が非常に限られていることから、「国家主義的国民教育」に不満をもちつつも、次善策として何とか折り合いをつけてきた在日朝鮮人たちが、今やその我慢も限界に達しつつある。

第二〇回大会（〇四年五月）を前に、朝鮮総連中央が肝入りで発足させたセデ（新しい世代）問題協議会（会長李相大^{リサダ}）のアンケート（朝鮮学校に通う学生生徒に対して無記名で行った）結果を見ても、朝鮮総連の「教育」に明るい前途は見えてこない。アンケートに答えた一〇代の若者の中で「将来子どもを朝鮮大学校まで送りたい」と答えたのはわずか九五％に過ぎなかった（終章で詳述）。今後どのように民族教育を取り戻していくのか。自主的民族教育を望む在日同胞の苦悩は深まるばかりだ。

この朝鮮総連の教育に対して、日本の一部弁護士や教育関係者は今もなおマイノリティの「民族教育」と錯覚し、その擁護を訴えている。例えば東京朝鮮第二初級学校（江東区枝川）の土地問題の係争（〇七年三月八日和解成立）で、彼らはこの問題を「民族教育に対する弾圧」として捉え、土地問題の解決だけでなく朝鮮総連教育の擁護論まで展開した。朝鮮学校教育を「子どもの権利条約」や「自由権規約」「社会権規約」、マイノリティの権利宣言など、国際人権法に照らしでも守るべき「民族教育」などと主張した。朝鮮総連の教育が北朝鮮国家の統制下で進められている国民教育だと認識していないから、このような誤解が起ころのである。

（注5）「朝青朝大委員会」

朝鮮総連の傘下団体である在日本朝鮮青年同盟（朝青、東京都文京区白山）の朝鮮大学校内政治組織。中央本部直属で、県本部と同等の地位を持つ。朝鮮大学校生は全員が朝青に加盟しているので「朝青朝大委員会」の指導下に置かれる。行政組織としては学長―教務部―各学部となっているが、政治組織としては「朝青朝大委員会」―支部（各学部）―班（各クラス）となっている。朝青中央本部の指導の下で活動するが、実質的には学内「学習組」を指導する「教養部」によって統制指導される。

〔注6〕階級的成分

当初、朝鮮労働党がマルクス・レーニン主義を指導思想として活動していたために、朝鮮総連もそれにならって活動を行った。この思想では、労働者・農民出身、貧困層出身の人たちを優先的に登用し、商人の子弟はできるだけ排除した。現在では、北朝鮮における階層制度およびその階級を指す語である「出身成分」と言われ、金日成・金正日に対する忠誠度が基準となっている。朝鮮総連幹部、それも上級幹部の子女が優遇される。

〔注7〕ユニバーストレーディング事件

ユニバーストレーディングは、当時朝鮮総連の第一副議長であった金炳植が、一九七一年六月に東京の西五反田に設立した貿易会社。会社の代表取締役役に日本人を据えて合法性を維持する一方で、高大基を責任者とする対韓国「非合法工作活動」を展開させていた。高大基は、旧日本海軍の予科練にいたため、朝鮮問題研究所員時代と同じくその人脈を利用し、日本の軍事情報の収集も行っていたと推測される。彼は一九七三年六月頃工作船で北朝鮮に召喚されたが、その直前に妻の渡辺秀子さんに一二〇〇万円もの小切手を渡し「これで帯広で暮らすように」と言って姿を消したという。その後、渡辺秀子さんと子ども二人は行方不明となっているが、秀子さんは殺害され、子どもは北朝鮮に連れ去られたとの情報もある。

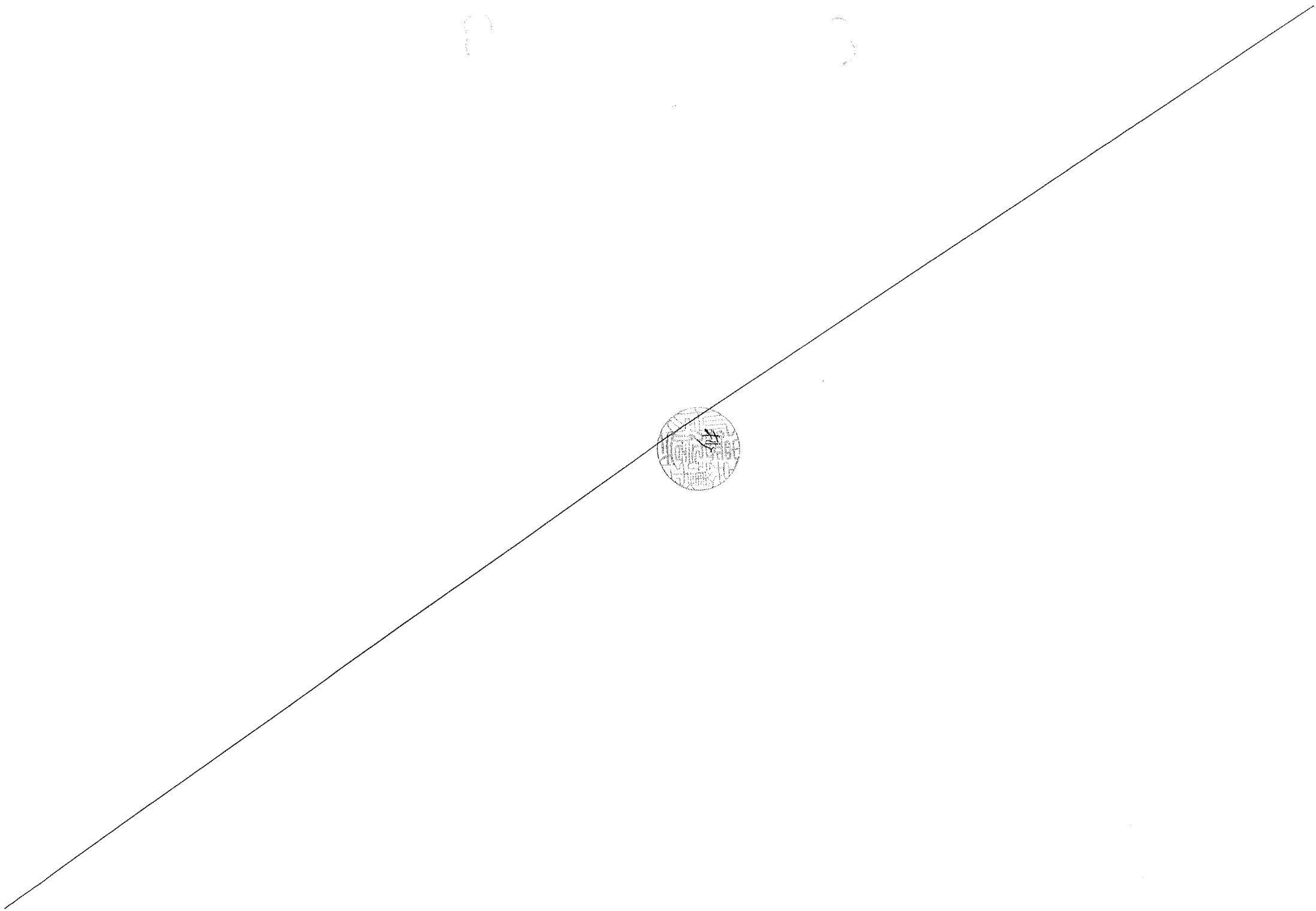
〔注8〕「学習組員」

非公然組織「学習組」のメンバーを「学習組員」という。「学習組」の詳細は、四章第二節の「学習組」朝鮮労働党日本支部」の項を参照。

第三章

財政活動

——金はどこから集まり、どこに流れたか



L.C. 1st

中公新書ラクレ 298

ちょうせんそうれん
朝鮮総連
きょぞう じつぞう
その虚像と実像

2008年11月10日発行

パク トウ ジン
朴 斗 鎮 著

発行者 浅 海 保

発行所 中央公論新社

〒104-8320

東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売 03-3563-1431

編集 03-3563-3669

URL <http://www.chuko.co.jp/>

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製 本 小泉製本

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取り替えます。

©2008 PARK Too Jin

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.

Printed in Japan

ISBN978-4-12-150298-8 C1221



朴 斗鎮
(パク・トゥジン)

コリア国際研究所所長。1941年大阪市生野区生まれ。大阪府立生野高校卒。66年朝鮮大学校政治経済学部卒業後、朝鮮問題研究所所員に。68年から75年まで朝鮮大学校政治経済学部教員を務めた後、(株)ソフトバンクで孫正義氏とともにパチンコ経営企画に携わる。その後、経済コンサルタントなどを経て、現職。朝鮮半島問題、在日問題に関して新聞・雑誌に寄稿するほか、テレビ、ラジオのコメンテーターとしても活躍中。著書に『北朝鮮その世襲的個人崇拜思想——キム・イルソン主体思想の歴史と真実』がある。